

人的環境としての保育者の語彙力と子どもの育ちの関係性についての研究 ～言葉のやり取りを通して見えてくるもの～

研究代表者	岩橋 道世	(こども園るんびにい副園長)
共同研究者	矢藤 誠慈郎	(和洋女子大学教授)
	北野 幸子	(神戸大学大学院准教授)
	菊地 義行	(境いずみ保育園理事長)
	只野 裕子	(こども園あおもりよつば園長)
	福澤 紀子	(こども園つるた乳幼児園園長)
	永田 久史	(第2 聖心保育園園長)
	平山 猛	(さざなみ保育園園長)
	青木 恵里佳	(子供の家愛育保育園副園長)
	田和 由里子	(春日こども園園長)
	筒井 桂香	(もとしろ認定こども園園長)
	花沢 幸苗	(中居林こども園理事長)
	坂崎 隆浩	(こども園ひがしどおり理事長)
	東ヶ崎 静仁	(飯沼こども園理事長)

研究の概要

乳幼児期の3歳未満児においては発達の段階において他の年齢に比べ周りの人的、物的、社会的環境により大きく影響を受けるとされている。前研究において2017年度の研究では3歳未満児の教育の質の在り方、つまり保育内容と人的環境に関する研究を、2018年度では同じく3歳未満児の教育における遊具環境と遊びの物的環境に注目しての研究を行った。「人的環境」「物的環境」がどう子ども達の育ちに影響しているかを検証した。そこから見えてきたものとして集団保育において、専門的知識を持った保育者が、日々その研鑽に努め乳幼児の教育・保育に当たることで保育者と環境構成の質が、家庭環境とは違った教育的な刺激材料として子どもの発達に有益な効果をもたらすものになるという結果を導き出した。

本研究ではこれらの研究を基に次の段階として理論的思考をもたらす言葉の獲得の環境が乳幼児期の3歳未満児の言語環境について集団保育の現場における保育者と3歳未満児の関係性の現状を把握し、言語発達により良い影響を与える保育者の質と保育の質の在り方を検証していく。保育者の「言語行動、非言語行動」と3歳未満児の「言語行動、非言語行動」の相互作用、及び集団から、獲得する言葉の質と量及び3歳未満児の言動に、どのような変化を見て取れるかを3回のビデオ撮影と保育者へのアンケートを基に検証するものである。

キーワード：

- ・ 3歳未満児の人的環境としての保育者の関わり方の重要性
- ・ 3歳未満児の言葉の育ちを促す保育者の役割に関する実践現場と社会の認識の差
- ・ 言語行動と非言語行動の関係性
- ・ 言葉のカテゴリー14種類と子どもの行動

1. はじめに

1-1 問題意識

乳幼児期に欠かせない環境の基本として人的環境、物的環境、社会的環境があげられる。

今回の研究は社会的環境の中から保育集団の中の保育者との関わりが言語発達に与える影響を検証したものである。今回社会的環境と位置付けたが、集団の関わりを成立させるのに欠かせない言語（言葉）の発達は人的環境にも大きく影響し、言葉の発達を促すうえで、物的環境といわれるおもちゃ等の媒体は欠かせない環境となる。よって今回取り上げた言葉の発達の研究には、人的環境及び物的環境、集団としての社会的環境が相互に影響し合い育ちを引き出すものと考えたものである。

当研究会は前々回において人的環境として保育者との愛着関係と子ども同士の関わりが乳児の発達に与える影響を検証した。また前回は物的環境が与える影響として3歳未満児が身近に関わる玩具や遊具その他教材と言われるものとの関わりから見えてくる育ちの影響について検証した。

今回は集団の中において、互いの意思疎通を可能にする手段の一つとして挙げられる言語の獲得が、保育現場における保育者や友達と言われる他者との関わりの中から見えてくる育ちを検証する。生活のほとんどを大人の援助に頼る3歳未満児の発達は、人的環境としての保育者との関わりによる相互作用から獲得する言葉の質と量及び子どもの行動目標等に深く関係するものと思われる。このことから保育者の関わり方が重要なカギを握ることの認識の上に立ち、保育者の言語能力や語彙力の質を上げることにより、子どもの言語能力の質の向上及びコミュニケーション能力、理論的思考の基礎となる言語発達を促すものと考ええる。

保育者の役割は子どもの発達の一つの指標として言語発達の度合いを確認することは保育現場においては当然であり、その発達を促す指導計画を作成し日々工夫し保育を行っている。絵本などの言語発達に欠かせない教材の選定や、生活に必要な社会的会話や語りかけをその場その場で適切に実践し、その結果を記録し次の成長へ繋げている。このように実践が伴った言葉の獲得は確かな知識として子どもの中に積み上げられ、概念の理解や科学的思考の基礎となる。保育者は専門家としての意識を持ち、持てる知識を個々の発達に即し提供し子どもの学びを促している。ただ一般社会においてこのことを理解し保育現場を見、言語発達に期待している人はそう多

くはないと予想されるのは確かである。

しかしながら先行研究などから乳幼児の言葉の発達は周りの大人の関わり方が大きく影響することがわかっている。周りの大人がどれほどの語彙を持ち会話をしているか、また話しかけられる言葉がどれほど豊かか、物や状況の表現の仕方が適切であるかにより、子どもが獲得する語彙の数や言葉の理解度も違ってくる。

多くの名詞や動詞、形容詞等の獲得は表現を豊かにし複雑な状況を適切に伝え、互いの意思疎通を十分なものにする。ただし文字や単語を形の上だけで数多く獲得してもそれらは言葉としての役割や意味を持たずコミュニケーションの力としては不十分な道具となる。よって本研究においては保育士の豊かな語彙力が子どもとの応答的な環境を通し、単なる単語の羅列ではなく、自らを表現する道具として獲得できているかを検証するものである。

今回の研究の実証研究では、子どもの育ちとして、幼児期における言語能力は、0歳～3歳未満児における言語環境の影響を大きく受け、人的環境の保育者との応答的関わりは、獲得する言葉の質と量及び子どもの行動目標等々に深く関係するというのである。

よって人的環境として大きな影響力を持つ保育者の関わり方が重要なカギを握ることの認識の上に立ち、保育者の言語能力の質を上げることにより、子どもの言語能力の質の向上を目指す必要があると考える。

保育者の援助と子どもの育ちの姿の関係性に関する事例を14のカテゴリーに分類しその発達を具体的に検証し、言葉とそれに伴う行為の意味合いを知識として獲得することで子どもの本来の語彙力の基礎となると考える。

1-2. 先行研究の検討

3歳未満児の言葉の育ちに関する研究及び3歳未満児への保育者の言葉がけの実態に関する先行研究は近年多い。

保育団体としては全国保育士会にて「保育の言語化等検討の委員会を立ち上げ、「養護と教育が一体となった保育の言語化」を平成28年にまとめている。又、当研究会でもこの3年間の研究以外にも、2011年度には日本保育協会「保育科学研究」第2巻（2011年度 代表者坂崎隆浩）にて0歳児の絵本を利用した教育的な効果を示し、その中で保育者の援助について「保育所では0歳からの乳幼児の発達を知り、保育を専門的に学び訓練を受けた保育士が

系統立てて計画を立てる。その計画を乳幼児との関係を通し、個々にスキンシップをとっていくことで、子ども自身の中に愛され大切にされているという自己肯定が育まれる。保育士と共に日常生活をおくり、繰り返し共感や承認を受け受容される経験をもつ乳幼児は情緒が安定し、意欲や関心をもって主体的に活動していく。0歳児におけるこの経験がその後の教育の土台に繋がっていくのである。集団という環境と保育の専門家が関わる保育所における0歳からの教育の存在を検証することにより、0歳からの保育所保育が乳幼児のより良い育ちを促す環境であることを明らかにした。」と述べている

大学側も、2018年神戸短期大学教育実践研究紀要第11号では子どもの気持ちを引き出す保育者の言葉とかかわりを実習での学生のエピソードをもとに検討している。

「子どもの何を育てたいかを明確にした指導計画を立てる。そして、それに沿って子どもの実態にあった柔軟な保育をしていくことが、子どもの心に寄り添った保育となっていくと考える。」

このように指針や要領、保育団体や大学の研究等も含めこれらについて発表されているが、2018年に出版された「3000万語の格差 赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話し方」(ダナ・サスキンド著 掛札逸美訳 高山静子解説)の内容は実に科学的に説明されており、訳をしている掛札氏が本書の内容は日本と世界の将来を真剣に考えるものとし、保育者の必読書と思える。著者のシカゴ大学医科大学院・小児外科教授による小児人工内耳移植による経験を基に、大きくは3歳までに果たす脳と言語の関係、又社会経済的に恵まれていない環境であったとしても、聞き、話す能力を十分に発揮できるとしたところにある。一例だけを紹介したい。専門職と生活保護家庭での発語を聞く差異を1年間でその差異は800万語、4歳児時点で3000万語の差と説明している。

解説をしている高山氏は言葉の格差を生むために家庭や園はどうすれば良いのか、問題解決提起している。

1-3. 本研究の位置づけと目的

言葉の獲得における重要な乳幼児期の3歳未満児を対象に、日々の保育の言語環境について保育現場における保育者と子どもの関係性の現状を把握し、言語発達により良い影響を与える保育者の質と保育内容の質の在り方を検証する。

2. 方法

2-1. 対象

- ・協力園(認定こども園及び保育所の14園)の0歳～3歳未満児クラスの乳幼児及び保育担当者

2-2. 方法

- ・保育現場のビデオ撮影及びアンケート
共通の保育課題(ままごと遊び等)と時間(30分以内)を設定し、保育をビデオ撮影して、実施した保育に関しての状況把握ができるアンケート(記述式)を実施する。

2-3. 時期

- ・令和元年6月～8月における任意の3日間を各園に選んで取り組んでもらった。

2-4. 内容

- ・ビデオを検証しままごと遊び等の中における保育者の言葉かけの量と内容(種類)の検証
- ・ままごと遊び等の中における対象児の発する言葉の量と内容の検証
- ・ままごと遊び等の中における保育者と子どもとの相互の関わりによって発せられた言葉の量と内容の検証
- ・ままごと遊び等の中における子ども同士の関わりの中で発せられる言葉の量と内容の検証

2-5. 分類

多様性、多方面にわたる言葉やパラレルトーク(保育者の言葉が子どもの行動目標に繋がるよう言語化する)を考慮し以下の3つの方法で分類した。

- (1) 非言語行動と言語行動
- (2) 14のカテゴリーを設け、保育者の行動を意味づける。
- (3) カテゴリーの使用頻度によるカテゴリーの関係を考慮した分類。

2-6. 分析と考察

調査結果に基づいて、各園に共通に見られる特徴や相違について分類し考察する。

3. 結果および分析

3-1 保育者の援助について

保育者の子どもへの関わりと子どもからの応答について、言語的行動と非言語的行動に分け記録用紙に記載された回数を集計した。各園において様々な傾向が見られたが、全体として以下のような結果が得られた。

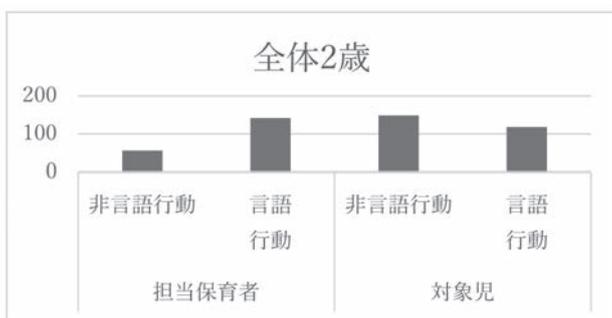
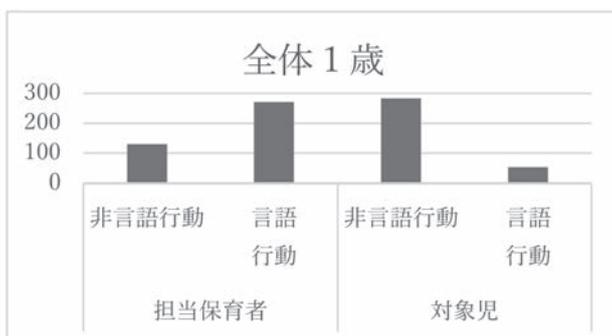
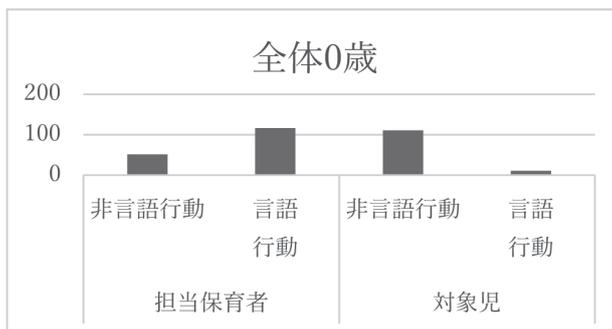
3-1-1 非言語行動、言語行動の頻度

0歳における全体的な特徴としては、保育者では

非言語活動より言語活動が高くなっていること、逆に対象園児においては、非言語行動が多くを占めている。対象年齢が言語の獲得及び言語表現能力が未発達であるため、対象園児の言語行動が低いと考えられるが、子どもは保育者の言葉かけに対し、身振り手振り表情等による応答を行っていることが窺える。

1歳児においても担当保育者の言語行動が多く、対象児においては非言語行動が多い。一方で子どもの言語行動について増加がみられる。

2歳になると保育者との関わりに言語行動が増加している傾向が見られる。一方で非言語活動も認められ、保育者への応答に使用されていることがわかる。



3-1-2 言葉かけの 카테고리と表出頻度

保育者の子どもへの関わりを次表に掲げる14種類の 카테고리に分け、子どもへの関わりについて分

類を行った。分類は実際に子どもに関わった保育者が行い記録表に記入してもらった。

カテゴリーの種類と内容

分類名	内容
つぶやき (自問)	保育者の感想や気持ち等を表す言葉
疑問	子どもへの問いかけの言葉
指示	子どもに行動を促す言葉
代弁	子どもの言葉にならない気持ちを言い換える言葉
誘導	子どもの行動を促す言葉
感想	子どもの行動に対する感想
禁止	子どもの行動を制限する言葉
同意	子どもの行動の追認の言葉
提案	～してみようか、等
事実 (こども)	子どもが物の名前 (名詞) や変わったことを示す言葉
ほめる	子どもの行為をほめる言葉
促す	子どもの行動を仕向ける言葉
行為の言語化 (先生)	保育者の行動を言葉で表す
オノマトペ	ぎゃー、しーっ、などの言葉

それぞれの年齢、カテゴリーの使用回数毎の分類結果は以下の通りである。

(1) 保育者の言葉かけに関するカテゴリー使用頻度

カテゴリーが使われた回数毎に合計してみると、使用頻度の傾向として、1位は0歳から2歳まで「誘導」、2位は0歳、2歳は提案、1歳は行為の言語化 (先生) で、3位は0歳から3歳まで「促す」となっている。4位からは0歳では代弁、事実 (こ

ども)、1歳では指示や提案、2歳では疑問、感想と続いている。

それぞれのカテゴリーについて対象児の年齢に関わらず誘導、促すといった関わりで子どもと接しており、それに加え年齢別に特有な関わり方法で接していると考えられる。一方で全く使われないか使用頻度が低いカテゴリーは、「禁止」「オノマトペ」「つぶやき」等であった。





担当保育者の使用カテゴリー上位

	1位	2位	3位	4位	5位
0歳	誘導	提案	促す	代弁	事実(こども)
1歳	誘導	行為の言語化	促す	指示	提案
2歳	誘導	提案	促す	疑問	感想

(2) カテゴリー使用の特徴

カテゴリーの使用について、担当保育者が使用した言葉をどのカテゴリーに分けるか見てみると、カテゴリー分類が明確にできなかつたり、「指示」「誘導」「促す」など類似の分類により境界があいまいな区分もあった。したがって記録においては一つの言葉かけあるいは非言語行動に対し、複数のカテゴリーを選択するという事例が多く見られた。また類

似したカテゴリー以外でも、子どもに対するメッセージをどのように送るかという保育者の考えにより、一つの言語活動に対し複数のカテゴリーを選択する場合に、いくつかの特徴的な組み合わせが見出された。

保育者の活動に対する複数のカテゴリーを選択した場合をもう少し詳しく見てみると、次の6つのパターンに分類できる。

カテゴリーの使用分類	選択されたカテゴリー
Aの中にBを含む	「指示」と「同意」、「提案」と「同意」等
Aを使ってBを表現する	「代弁」と「感想」、「事実」と「誘導」等
AでもありBでもある	「誘導」と「提案」、「誘導」と「促す」等
Aする前提にBがある	「促す」と「同意」、「提案」と「同意」等
AするためにBを使う	「疑問」と「つぶやき」、「促す」と「同意」
その他	上記以外のもの

分類中「Aを使ってBを表現する」が最も多く、さまざまな組合せで子どもと対峙していることが窺える。その中で全体的な使用頻度上位の「誘導」「提案」「促す」が多く使用されていた。

3-1-3 保育者の行動への省察

以上の結果により、保育者による子どもへの働きかけにおいて、言語行動、非言語行動については、保育者による言語行動に対して非言語行動が多く見られた。また保育者が意図する関わりのカテゴリーでは「誘導」「提案」「促す」が上位を占めたが、保育者は子どもへの関わりにおいて、複数のカテゴリーを考慮し、状況に応じた複数の意味を含んだ言葉かけをおこなっていることが考えられる。

3-2 子どもの育ちについて

今回の取組を通して、子どもの変化についてのコメントから「言語と行動の関係性の変化」「言葉の

数の変化」「種類の変化」の3つの観点から子どもの変化についてみると、次のような結果となった。

言葉と行動の関係性の変化については年齢を問わず変化ありと答えており、種類の変化についても同様であった。一方言葉の数の変化については、0歳児及び1歳児は変化なしが多く、2歳児では変化ありが8割を超えていた。

次に、保育者の働きかけに対する子どもの反応について、「肯定的反応」「否定的反応」「その他の反応」及び「無反応」に分け、推移を見た。「肯定的反応」は保育者の意図した行動に対し子どもが進んで関わろうとしたり、受入れたり、取り入れたりして遊びを展開する状態、「否定的反応」は保育者の働きかけを拒絶した状態、「その他の反応」は保育者の関わりに反応はしているが、意図した活動ではない状態、そして「無反応」は保育者の関わりに態度としての表出が認められない状態である。

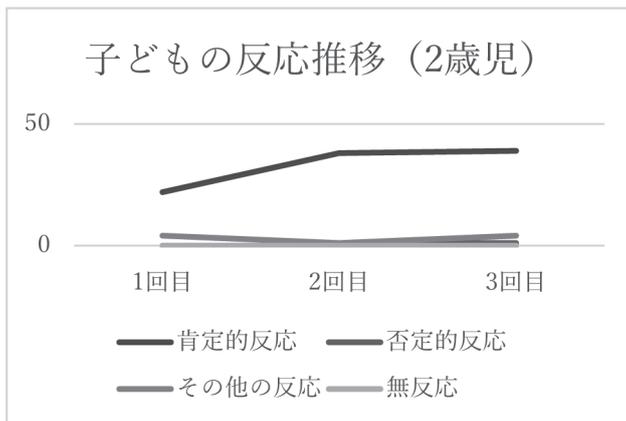
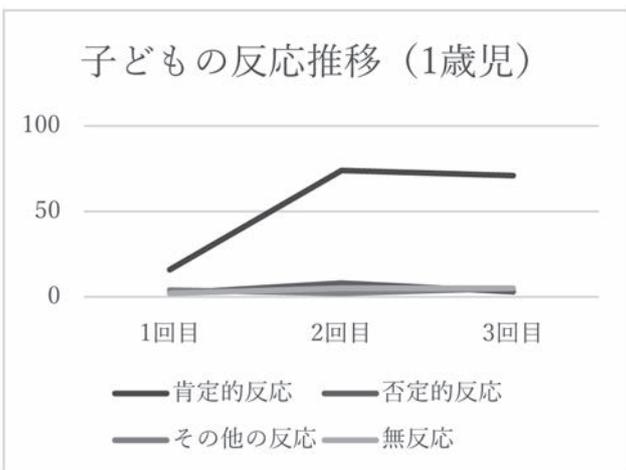
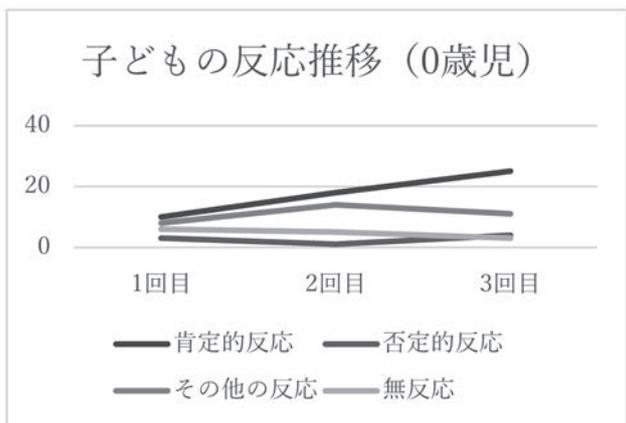
担当保育者による感想（14か園に質問し回答があったもの）

0歳児	変化あり		変化なし		不明		合計	
	園数	%	園数	%	園数	%	園数	%
言葉と行動の関係性の変化	4	100	0	0	0	0	4	100
言葉の数の変化	1	25	2	50	1	25	4	100
種類の変化	4	100	0	0	0	0	4	100

1歳児	変化あり		変化なし		不明		合計	
	園数	%	園数	%	園数	%	園数	%
言葉と行動の関係性の変化	6	100	0	0	1	0	7	100
言葉の数の変化	4	38	3	63	0	0	7	100
種類の変化	4	67	2	33	1	0	7	100

2歳児	変化あり		変化なし		不明		合計	
	園数	%	園数	%	園数	%	園数	%
言葉と行動の関係性の変化	5	83	0	0	1	17	6	100
言葉の数の変化	5	83	1	17	0	0	6	100
種類の変化	5	83	0	0	1	17	6	100

保育者の働きかけに対する子どもの反応



全ての年齢に関して概ね肯定的な反応が見られた。回数を重ね、保育者の関わりが増加することで肯定的反応も増加している。また逆に否定的反応、無反応は低下している結果となった。

3-2-1 言語行動

0歳児の関わりでは言語による反応はほとんど見られないが、喃語の増加が見られた。1歳において

も非言語活動による反応が回数に関わらず多く見られるが、一語の発語が見られる。保育者の問いかけによる答えや、保育者の言葉を繰り返すといった行動が多く見られる。2歳児になると、発語は多くなり、また一語文だったものから多くの語をつなげて会話になっていく様子が窺える。また・声かけをすることで子どもからの応答が増加している。

子どもの応答の内容として保育者が認識したもの

としては、相手の要求に応える「応答」、自分の感情を行動のみの表現から言葉を使った表現への変化が見られた、「子ども－保育者」関係による言葉の増加が見られた、遊びの繰り返しから遊びが膨らんだり場面にあった言葉が増えた、といったものが挙げられていた。

3-2-2 非言語行動

非言語活動に対する保育者の所見を年齢別にみると、0歳児への言葉かけへの反応は非言語でのものが多い。その非言語的な活動の中に育ちが見られ、その内容は、仕草、表情（笑顔）、認識、動作、等に見ることができる、といった所見が見られた。

また、1歳児との関わりにおいては、「子ども－保育者」「子ども－保育者－子ども」へと遊びが展開していく様子が窺え、保育者との関わりで、さらに非言語行動の増加が見られた。

2歳児においては、非言語活動から言語活動への移行が顕著に見られる中でも、非言語行動の変化としては、遊びの回数を経るにつれ、保育者や友達の真似をすることから自らやりたいことをやろうとするといった行動の変化が指摘されている。

3-2-3 子どもの育ちについての省察

遊びの回数を重ね、保育者の関わりを深化・発展させることを通して、子どもの言語行動は大きく成長するのではないかということが考えられる。「子ども－保育者」関係による言葉の増加が「子ども－保育者－子ども」関係に広がる基盤となっていることが示唆される結果となった。

また、未だ言葉を獲得していない状態の0歳児から次第に言語活動に移行していく2歳児において、保育者の言葉かけを通して言葉の獲得につながっていることが明らかとなった。言葉では応答できない0歳児であっても、同じ遊びを繰り返し保育者による言葉かけを受け続ける体験の積み重ねから次第に言葉の萌芽が現れてくるのが3回の遊びの展開から見えてきた。

3-3 保育者の援助と子どもの育ちの姿の関係性に関する事例

3-3-1 具体的な関わり的事例

前項で分類した14カテゴリーについて、具体的な事例をそれぞれ担当した保育者からエピソードを述べてもらった。

(1) つぶやき 2歳9ヶ月 (男)

ままごとの最中保育者の見守りの中で「一緒にや

ろう」と、となりの子どもに囁く。となりの囁かれた子どもも「うん」と答え、「なに、つくろうかな」とつぶやく。

(2) 疑問 2歳9か月 (男)

環境設定として、保育者が遊びのヒントとなるような声かけをすることにより、自分の使いたいものの確保だけでなく、皆と関わりながら一緒に遊ぶ様子が見られる。保育者が「これ、どうやったらいいのかな？」の声かけをしても返事は返ってこない。疑問をなげかけるのは保育者側である。1回・2回と繰り返すが言葉は増えるが疑問の言葉は出てこない。

(3) 指示

環境設定として保育者の非言語行動、言語行動は増え2歳児の言語行動、非言語行動も増えてくるが保育者からの指示の言葉は出てこない。

0歳児・1歳児・2歳児の保育者とも園児への指示の言葉はなかった。これは保育者の指示ではなく園児自らの考えで行動させるための環境設定を心がけているあらわれと思う。

(4) 代弁 0歳11か月 (男)

保育者が人形のオムツ交換をする時「さっぱりしたね」「気持ちよかったね」とオムツ交換をされた時の気持ちを代弁することで、園児からは「あー」や「うー」などの言葉が出てきた。保育者と園児が気持ちを共有したことになる。

(5) 誘導 3歳2ヶ月 (女)

フェルト地の手作り食材で、作った料理を皿に盛り付けて

「お友だち呼んでみる？」の保育者の声に「いっしょに、ごはんたべるひと、いませんか？」と誘い、お友だちも一緒に「いただきます」「おいしいね」

「これは〇〇のあじだね」等々会話が弾んだ。

(6) 感想 2歳2か月 (男)

保育者が人形を抱っこして、「トントン」しながら「お休み」や「おはよう」の言葉かけをする。その様子を見ていた子どもも真似をする。人形にコップを近づけ何かを飲ませ「ごくごく、美味しいね」など保育者が気持ちを言葉で伝える。

(7) 禁止

0歳児から2歳児まで全ての子どもに対して「禁止」の言葉かけをしていなかった。

(8) 同意 2歳1か月 (女)

ままごとと道具を子どもが取りやすい場所に置く。子どものお気に入りの道具を手に入れているのを見つけ「見つかった？」と聞いたり、持っている物を友だちが、無理やり取ろうとしたので、いけないこと

を伝えると「わかった」と同意する。

(9) 提案 0歳11カ月（女）

人形のおむつを替えた後に「〇〇ちゃんもオムツ替えてさっぱりしようか」の声かけに人形の方を見る仕草をする。人形を使ってオムツ替えを見ることで自分がオムツを替える様子を見たり2歳児クラスのお友達がトイレに行く様子を見たりする姿が出てきた。「お姉ちゃんもおしっこかな？トイレ行ってるね。〇〇ちゃんと一緒にだね」と声をかけると両足をパタパタしていた。

(10) 事実 1歳3ヶ月（女）

果物のおもちゃをじっと見ている本児。保育者が「おいしそう、あーん」と食べる真似をすると本児も両手で持ち「あーん」と口を開ける。「おいしい？ 大きなお口だね」と声を掛けるともっと大きな口になる。「大きなお口ですごくおいしそう。先生も食べたいな！」の声に保育者の口元に持ってきて食べさせようとする。もっと大きな口を開けてと言う仕草、本児も大きく口を開けたその時一瞬目が合い互いにほほえみ合う。

(11) ほめる 2歳10ヶ月（男）

ままごと用レジスターの使い方が分からない本児。周りを見ながら誰にどう聞けば良いのか、様子を伺っている。上手く操作してしているお友だちを見つけて、思い切って「こうするん？」と尋ね、本児も行う。「そうそう上手」と褒められると照れながら、はにかんでいた。その後は「おらっしやいませ」「ピッピッ」とやり取りして楽しんでいた。

(12) 促す 0歳11か月（女）

オムツ替えの際に「キレイキレイするからみてね」とお人形のおむつ替えの様子を見せていき、オムツ替えに興味を持たせ、「Yくんもキレイキレイしようよ」と誘いをしながら、一緒にやろうと促している。

(13) 行為の言語化 2歳8ヶ月（男）

ままごとで炒める真似をしながら、「きょうは、いために、しようかな？」

「なんでかな？これにいれていい？」と自分の行為を言葉にしていた。

(14) オノマトペ 1歳1か月（女）

細い毛糸を容器に入れながら「ちゅるちゅる」「うん。ちゅるちゅる」「とんとん」と言語化していた。

3-3-2 保育者の援助と子どもの育ちの姿の関係性に関する事例の考察

事例の中ではカテゴリーが、単独に保育の中で活かされているのではなく複数が重なりあっているこ

とがうかがい知ることができる。年齢が低いほど保育者の言語行動が主であり、子どもは非言語行動が主であった。年齢が増す毎にそのことが逆転していることが事例から見えてきた。一方驚いたことにカテゴリー「禁止」においては子どもに対して全く「禁止」の言葉かけをしていない。このことは日頃から保育場面において肯定的な言葉かけをしているということが実証されたといえる。「オノマトペ」に関しては、0歳児において擬音として捉え「ごくごく」「あむあむ」「とんとん」。1歳児も「ちゅるちゅる」「とんとんとん」「ぺたーん」「まきまき」や「きゅつきゅうつきゅう」など保育実践では多く使用されているが行為の言語化として捉え、オノマトペとしての認識が保育者に薄いと感ずることができた。各カテゴリーにおいて言葉に対して表現する力が育っていると感じたり、1対1から1対2や3という具合に友だちとの関わりが広がってきていると感じた保育者もいた。

4. 結果と事例の関係について

4-1 保育者の関わりと子どもの育ちの関係についての考察

0歳から、2歳までの3年間は、全く言葉が話せない時期から、簡単な会話が話せるようになるといった大きく成長する時期で、今回の研究結果では、言語行動と非言語行動の関係性からみると、各年齢に共通の傾向として保育者は言語行動の頻度が高く、対象児は、非言語行動の頻度が高くなっていった。0歳から1歳、2歳と年齢があがり、言葉の獲得が進むにつれ、対象児の言語行動の値も増えている。また、1回目、2回目、3回目と関わりを深めていくと、それに伴って対象児の肯定的反応の値も上がった。このようなことから子ども達にとってより良い応答的な関わりを持つことでさらに子ども達は、遊び等をより楽しんだり知識として獲得していると考えられる。

今回の研究において、回数を重ね、より進化・発展した関わりを持つことや年齢があがってより良い行動の変化がみられた要因には、その年齢に応じた対応を日々繰り返し行っていることが大きく関わっていると考えられる。小さな対応や援助、遊び等の積み重ねがとても大切であることが実証されたのではない。

また、言葉のカテゴリー分類の特徴をみると、どの年齢も、誘導、提案、促すのカテゴリーが多く見られていることから、保育者の言葉かけや行動が対

象児の行動の変化に繋がっていくことがわかる。保育者の自由記述からも、言葉と行動性の変化があると、ほとんどの人が感じており、これらの言語行動は、対象児反応推移でも実証されており、肯定的反応を見せることが多くなっている。但し0歳児については、その他の反応が見られる。これは保育者の行動に理解している段階ということもあり、興味を示さなかったり促す行動を保育者がしても、関係ない反応をしている等様々見られている。1歳児は保育者の関わりが少ない保育と関わりをより進化・発展していく保育では、肯定的反応が極端に増えることが見られた。これは保育者の行動が理解できるようになってきたと考えられ、子ども達は、日々保育者の援助の元に過ごすことで言葉や行動の獲得を少しずつ積み重ねてきているのではないかと考えられる。

5. おわりに

日本保育協会保育科学研究所の研究においては保育総合研究会として、現場からの実証研究として保育の可視化についてドキュメンテーションを通して発信し、次に人的環境において現場での具体的な保育者の言葉や行為における質的内容、そして実践において物的環境構成はどのようになっているのか実証研究を重ねてきた。今回更にこのような環境の中で子どもの言葉の獲得についての現場における保育者の非言語行動及び言語行動が子どもの言葉の獲得にどのような影響を及ぼし左右していくのかを研究するに至った。子どもの言葉の発達には保育者の言葉を始め、関わり方に大きく影響されることを確認し、保育者がかける言葉は子どもの言動にどのようにアプローチしているのかを例を挙げて確認することができた。

0歳児への言葉かけへの反応は非言語でのものが多い。その非言語的な活動の中には育ちが見られ、その内容は、仕草、表情（笑顔）、認識、動作、等に見ることができる。

1歳児との関わりでは、「子ども－保育者」「子ども－保育者－子ども」へと遊びが展開していく様子が窺え、保育者との関わりで、さらに非言語行動の増加が見られた。2歳児においては、やりたいことを真似する行動（非言語活動）遊びの回数を重ね、保育者の関わりを深化・発展させることを通して、子どもの言語行動は大きく成長するのではないかと考えられる。「子ども－保育者」関係による言葉の増加が「子ども－保育者－子ども」関係

に広がる基盤となっていることが示唆される結果となった。

また、未だ言葉を獲得していない状態の0歳児から次第に言語活動に移行していく2歳児において、保育者の言葉かけを通して言葉の獲得につながっていることが明らかとなった。言葉では応答できない0歳児であっても、同じ遊びを繰り返し保育者による言葉かけを受け続ける体験の積み重ねから次第に言葉の萌芽が現れてくるのが3回の遊びの展開から見えてきた。

本研究を通して、「人的環境としての保育者の語彙力と子どもの関係性」において語彙力を広げていくためには0歳からの保育者との言葉のやりとりの積み重ねが重要だということが現場の実態調査から実証できた。

参考文献

- ・保育所保育指針
- ・幼保連携型認定こども園教育・保育要領
- ・日本保育協会「保育科学研究」第2巻、7巻、8巻
- ・2018年神戸短期大学教育実践研究紀要 第11号
- ・「3000万語の格差 赤ちゃんの脳をつくる、親と保育者の話し方」（ダナ・サスキンド著 掛札逸美訳 高山静子解説）明石書店 2018年
- ・子どもの見ている世界 誕生から6歳までの「子育て・親育ち」内田 伸子 春秋社 2017年
- ・まごころの保育 堀合文子のことばと実践に学ぶ 内田 伸子 小学館 1998年

② 研究対象

園（園数14園、園の背景、クラスの人数）、対象園児（男女、年齢、保育歴）、保育者（経験年数等）、場面の特徴（遊具と遊び）

◎さざなみ保育園：熊本県

対象児童：0歳児クラス（9名） 男子 10ヶ月 保育歴＝2ヶ月

（場面の特徴：ままごとの玩具・食べ物・お皿・スプーン・フォーク・お人形玩具）

1歳児クラス（7名） 女子 1歳 7ヶ月 保育歴＝7ヶ月

2歳児クラス（19名） 女子 2歳 7ヶ月 保育歴＝2年

撮影者：0歳児クラス 経験年数12年目（保育者数 保育教諭2名 保育補助2名）

1歳児クラス 経験年数6年目（保育者数 保育教諭2名）

2歳児クラス 経験年数15年目（保育者数 保育教諭2名 保育補助1名）

◎つばめこども園：熊本県

対象児童：1・2歳児クラス（30名） 女子 3歳2ヶ月 保育歴＝2年2ヶ月

（場面の特徴：花おはじきのチェーンリング、プラスチックチェーン、フェルトの手作り食材、お皿、お椀、コップ、レンゲ、お玉、フライパン、段ボールで作った冷蔵庫）

撮影者：1・2歳児クラス 経験年数14年目（保育者数 保育教諭5名）

◎つるた乳幼児園：青森県

対象児童：1歳児クラス（14名） 男子 2歳2ヶ月 保育歴＝1年10ヶ月

（場面の特徴：ままごとセット、キッチン、人形、おんぶ紐）

撮影者：1歳児クラス 経験年数16年目（保育者数 保育教諭3名）

◎ドレミこども園：岩手県

対象児童：0歳児クラス（10名） 男子 11ヶ月

1歳児クラス（7名） 男子 1歳 3ヶ月 保育歴＝6ヶ月

（場面の特徴：お皿、コップ、スプーン、木製の包丁、まな板、食べ物、ハンカチ、ぬいぐるみ）

2歳児クラス（17名） 女子 2歳11ヶ月 保育歴＝2年

（場面の特徴：1回目 流し台、コンロ、お鍋、フライパン、フライ返し、食器、おたま 2回目 お人形、炊飯器、毛糸、折り紙、透明容器 3回目 お弁当箱、お菓子の空き箱）

撮影者：0歳児クラス 経験年数17年目（保育者数 保育教諭5名）

1歳児クラス 経験年数6年目（保育者数 保育教諭4名）

2歳児クラス 経験年数19年目（保育者数 保育教諭3名）

◎もとしろ認定こども園：徳島県

対象児童：0歳児クラス（8名） 女子 11ヶ月 保育歴＝3ヶ月

女子 1歳 保育歴＝3ヶ月

（場面の特徴：ももちゃん人形）

1歳児クラス（18名） 女子 1歳5ヶ月 保育歴＝3ヶ月

（場面の特徴：おままごとセット（お皿・食べ物・茶碗・コンロ・机・パックパーツ）

2歳児クラス（17名） 女子 2歳10ヶ月 保育歴＝3ヶ月

（場面の特徴：ままごと、レジスター、野菜の玩具、作ったお金等）

撮影者：0歳児クラス 経験年数 1年目（保育者数 保育教諭3名）

1歳児クラス 経験年数 4年目（保育者数 保育教諭2名 保育士2名）

2歳児クラス 経験年数 3年目（保育者数 保育教諭4名）

◎ゆうかりフレンズ：兵庫県

対象児童：1歳児クラス（19名） 1歳10ヶ月 保育歴＝4ヶ月

（場面の特徴：木のままごとの玩具）

撮影者：1歳児クラス 経験年数7年目（保育者数 保育教諭4名）

◎こども園るんぴにい：大分県

対象児童：0歳児クラス（10名） 女子 11ヶ月 保育歴＝3ヶ月

（場面の特徴：人形）

1歳児クラス（11名） 女子 1歳6ヶ月 保育歴＝8ヶ月

2歳児クラス（15名） 男子 2歳8ヶ月 保育歴＝1年9ヶ月

撮影者：0歳児クラス 経験年数12年目（保育者数 保育教諭3名 支援員2名）

1歳児クラス 経験年数12年目（保育者数 保育教諭3名 支援員2名）

2歳児クラス 経験年数23年目（保育者数 保育教諭1名 保育士1名 保育補助1名）

◎子供の家愛育保育園：東京都

対象児童：0歳児クラス（6名） 男子 1歳3ヶ月 保育歴＝3ヶ月

（場面の特徴：ぬいぐるみ、おんぶ紐、お出掛けバック、布絵本、カメラ、車、ガラガラ）

1歳児クラス（15名） 男子 1歳10ヶ月 保育歴＝3ヶ月

（場面の特徴：ぬいぐるみ、おんぶ紐、お出掛けバック、布絵本、カメラ、車、ガラガラ）

撮影者：0歳児クラス 経験年数 8年目（保育者数 保育教諭3名 保育士1名 看護師1名）

1歳児クラス 経験年数 8年目（保育者数 保育教諭5名 保育士1名）

◎春日こども園：広島県

対象児童：2歳児クラス（20名） 2歳9ヶ月 保育歴＝2年5ヶ月

（場面の特徴：ままごと（食べ物、食器、スプーン等））

撮影者：2歳児クラス 経験年数34年目（保育者数 保育教諭4名）

◎こども園青森よつば：青森県

対象児童：0歳児クラス（6名） 男子 11ヶ月 保育歴＝2ヶ月

1歳児クラス (11名) 女子 1歳7ヶ月 保育歴=1年4ヶ月
2歳児クラス (12名) 男子 2歳8ヶ月 保育歴=2年3ヶ月

撮影者：0歳児クラス 経験年数12年目 (保育者数 保育教諭3名)
1歳児クラス 経験年数1年目 (保育者数 保育教諭2名)
2歳児クラス 経験年数21年目 (保育者数 保育教諭2名)

◎中央保育園

対象児童：0歳児クラス (14名) 女子 11ヶ月 保育歴=8ヶ月
(場面の特徴：ぼぼちゃん人形)

1歳児クラス (28名) 女子 1歳11ヶ月 保育歴=1年3ヶ月
(場面の特徴：食器・フライパン・食べ物玩具・おんぶひも・エプロン・ハンカチ・人形)

2歳児クラス (22名) 女子 2歳11ヶ月 保育歴=2年4ヶ月
(場面の特徴：ままごと玩具・人形・レジスター・カバン・布団・ハンガー・手作り洗濯機)

撮影者：0歳児クラス 経験年数5年目 (保育者数 保育士3名 看護師1名 その他1名)
1歳児クラス 経験年数15年目 (保育者数 保育士5名)
2歳児クラス 経験年数15年目 (保育者数 保育士5名 看護師1名)

◎朝日こども園：大分県

対象児童：0歳児クラス (6名) 男子 1歳 保育歴=8ヶ月
(場面の特徴：ままごとの食べ物、コップ、人形、絵本 (食べ物に関する))

1歳児クラス (14名) 女子 2歳1ヶ月 保育歴=1年8ヶ月
(場面の特徴：ままごとキッチンセット (食べ物、食器、お弁当箱等) エプロン、バック、絵本)

2歳児クラス (10名) 女子 2歳4ヶ月 保育歴=1年7ヶ月
(場面の特徴：ままごとキッチンセット、お人形、着替え、靴下、お医者さんごっこの道具)

撮影者：0歳児クラス 経験年数6年目 (保育者数 保育士2名)
1歳児クラス 経験年数4年目 (保育者数 保育士2名)
2歳児クラス 経験年数15年目 (保育者数 保育士2名)

◎田迎こども園：熊本県

対象児童：0歳児クラス (10名) 女子 9ヶ月 保育歴=3ヶ月

撮影者：0歳児クラス 経験年数8年目 (保育者数 保育教諭3名 養護教諭1名)

◎納場保育園：茨城県

対象児童：1歳児クラス (19名) 男子 1歳6ヶ月 保育歴=3ヶ月
(場面の特徴：ままごと)

2歳児クラス (20名) 男子 2歳9ヶ月 保育歴=1年4ヶ月

撮影者：1歳児クラス 経験年数6年目 (保育者数 保育教諭5名 看護師1名 その他1名)
2歳児クラス 経験年数11年目 (保育者数 保育教諭3名 保育士1名)

2-3. 研究期間 ビデオ撮影の日時（14園分）

- さぎなみ保育園：7月4日～25日のうち3日間
10時～16時30分のうち30分間
- つばめこども園：7月16日・22日・23日
9時55分～10時19分のうち10分間
- つるた乳幼児園：6月28日～7月5日のうち3日間
10時～10時20分のうち10分間
- ドレミこども園：7月8日～16日のうち3日間
9時30分～10時30分のうち2分～30分間
- もとしろ認定こども園：7月4日～7月14日のうち3日間
10時～10時20分のうち10分間
- ゆうかりフレンズ：7月8日・18日・19日の3日間
10時10分～10時25分のうち10分間
- こども園るんびにい：6月18日～7月22日のうち3日間
9時38分～10時30分のうち1分～10分間
- 子供の家愛育保育園：7月10日～7月5日のうち3日間
10時～10時30分のうち15分間
- 春日こども園：7月12日・17日・23日の3日間
10時10分～11時のうち20分～30分間
- こども園青森よつば：7月1日～7月17日のうち3日間
10時10分～10時35分のうち10分間
- 中央保育園：7月8日～7月17日のうち3日間
9時40分～15時のうち5分～10分間
- 朝日こども園：7月16日～7月25日のうち3日間
9時20分～10時50分のうち10分間
- 田迎こども園：7月3日・6日・9日の3日間
9時27分～10時03分のうち3分～4分間
- 納場保育園：7月3日～7月17日のうち3日間
10時15分～10時38分のうち5分～10分間